

## 演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 4号

12月24日(火)

【石川】

野々市明倫高等学校

### フラン

「きらきら光る お空の星よ」

流れ星を見ながら微笑み合う理恵と母。流れ星って美しい、だけど宇宙のごみ。カナコが死んだのは私のせいじゃない。悪いのはフラン。フランはかいじゅう。だからふたをしないと…

幕が開いたとき、まず一番に中央に置かれたゴミ箱が目に入った。純真な子供がクレヨンで落書きしたような白地の舞台装置は抽象的な世界観を表しており、さらにゴミ箱が異質なものであることを際立たせていた。また仲良く「きらきら星」を歌を歌う家族3人や白い服を着た代弁者がポーズを取る場面によって美しい印象を受けたが、事実を隠すためにフランをゴミ箱に押し込んだ場面以降は生々しい人間のフランした演出に変化し、それに伴いホリゾンタイトの暗くしていくことで相乗効果を生んでいた。

この劇には、事実を象徴するフランの暗い衣装と代弁者達の白い衣装であったり、「ひみつのあじはみつのあじ」の台詞からその「みつ」は「つみ」であるというような言葉遊びがあったりと随所で対比の工夫がされているように感じた。劇中何度か登場した「きらきら星」からは、私たちの知る明るく軽やかさとは裏腹に暗く重々しい印象を観客に与えた。代弁者達が落とす星とは事実がもたらす罪や後悔であり、空の上の星は理恵の後悔、それが流れ星となって罪を犯した人に降り注ぐ「ほんと」であったと捉えた。母に星が降り注ぐ場面では、母の罪が具現化されたものとして小道具が効果的に使われていた。代弁者らの間の取り方や声色、同じ言葉をこだませる演技に圧倒された。

この作品は理恵の空想なのか現実なのか、フランは実在するか否か、最後まで講評委員会の中でも意見が割れお互い深い議論が飛び交った。観客が多様な見方のできる劇であろう。いずれにせよ、人間は弱く自分がかわいいが故に己を守ろうとする。だから、罪を隠しふたをする。その中にあるのが人間の腐乱で不乱な部分であることは確かだ。

～フランス童謡「きらきら星」より～

「あのね、おかあさん。わたしにはひみつがあるの」